

第三章 東京医学講習所開設への序曲（大正5年7、8月）

森村市左衛門男爵、閣下^{（注）}を芝・本高輪の邸に



「ただ今受付きいたしましたからどうぞ」と新築洋館応接間に通さる。前に一面のしだ原に遙かに見る池の内に金堂の建つあり。山に一面に栄え茂りて夏をえがおに。室には書籍の満つあり。

「これ、只今承りましたる事は私には何だか解せませぬ。元来私は健康を害しましてかかる御話しくとすぐ身体にさわる様な次第であります。生内、近来又インフルエンザに、かけを病んで居りますから甚だすまぬが悪しからず思つて下さい。実は井上^{（注）}さんから何か御説をとあつたからあつたので、面会いたしました次第で、他の要件では一際お断りいたして居ります。ご承知の通り、この前も二人も折

角お越しくだされましたのに、おことわりいたしました次第、どうぞ左様ご承知下さい。この血涙録や団報は頂戴いたしておきます。」

(注1)井上角五郎か。長委三美は前に井上を訪問していることから紹介を受けたのであろう。

森村市左衛門(1839.12.2~1919.0.11) 立志伝の人。弟豊(慶應義塾出身)と森村ブラザーズをニューヨークで開業。佐倉順天堂の当主佐藤尚中の長男・佐藤百太郎や義弟・大倉孫兵衛らも参加。森村財閥の創設者。ノリタケカンパニー、日本碍子や東陶なども森村組から発展して出来た。教育・社会活動に積極的に動き、慶應義塾や早稲田大学には多額の寄附を行った。東京医学専門学校にも高額の寄附を寄せている。

大正5年7月5日

前沖繩県知事、高橋琢也先生を鈴木亭にて

七月五日、寺尾^(注1)、福本^(注2)、秋^(注3)、大角^(注4)先生を代表して

「私は諸君には始めてお目にかかります。諸君の代表者とは度々話しています。私が先にここに立つ事は甚だ失礼と存じますが、年長者というので、押されて立つたのであります。今日五名集まったものは、諸君五百名のために、十二分のご同情をしとるものであります。私一人としても諸君のために、別段縁故のある者ではありません。然るを同情するや何にきするか。正に推し、邪は退けるに他ならないのであります。この老骨の同情シタルや、何の益する事もなく只諸君の便利を計るのみ。他の諸君においても同情なさいましたのはかかることと思ひます。尚、諸君が毎日毎日会合して熟慮されてる事も承つています。諸君が笈を負つて上京された其目的を期せられんことを望むは切であります。我々は如何にしたらよろしきか、将来一如としてご尽力あらんことを、又この件たるや諸君五百、いな国家のため社会の事と存じております。ですから、東洞^(注5)大家の言の如く、人事を尽くして死する是天命なりとの言葉の様に、人事を尽くして、そして目的を貫徹せん事我期します。」

(注1)寺尾亭 (注2)福本誠(日南) (注3)秋虎太郎 (注4)大角桂巖 (注5)吉益東洞

大正5年7月8日

前陸軍軍務局長、軍医総監 文、医学博士 森林太郎閣下の千駄木の邸^(注1)に



薫香ゆかしき書齋に通されぬ。是七月八日午後八時

「其後文部大臣にも局長にも会わないで話しはまだしていない。先日も二、三度文部省には行つたが、文展の話で大臣次官に会わないで事がすんだ。昨日、山根^(注2)と中央衛生会^(注3)であつたが、なかなか元気はいい。復校せん学生は幾人でも首を折るといつていた。

其後、如何したか。今聞きし処によれば、新たに学校建つとの事で至極結構なる事と思う。自分もとより皆賛成ある事と思う。日本医専のような学校は望まぬが充実したる学校は幾らあつてもいいと思う。

学長、教授会の件につきても大いに心配をするが、会に出る事は許してもらいたい。私は一際おこと

はりして居る。昨日も保健会の発会式でしかも、祝始めであるから、是非出てくれとあったがおこわ
りした次第であるから悪しからず許してもらいたい。会に出たり主だちたる事をするのはおれはいや
だ。私の意のあることは、この度出席さる御方か手紙に書いてもいいと思つて居る。そして佐藤さん^(注4)
立つてくださる事は至極結構な事で大に賛成し又すすめる決心である。

秋さん^(注5)は感心な人だね。おれは一面識もない人だが挨拶くらいはしたかもしれん。おれの弟と秋さん^(注6)
の弟とが親しき間であるという事を聞いて居る。軍人あがりで元氣あり立派な御方は木村莊介君^(注7)だと思
う。鈴木よりは優れていると思う。一見馬鹿の如く、心中大いに得るところある人だ。これは海軍で。
陸軍では佐藤であらう。

どうぞ五人の御方にはよろしくいつてくれ。尚御成功を祈ると。五人の中で福本君^(注8)は知つて居る。他
の人は知らんが然し結構なる方々であると思う。」

(注1) 森鷗外邸は観潮楼と名づけられていた。(注2) 山根正次(注3) 全国的なコレラ流行に対して検疫、予防などを
検討するために政府が会議を開いたがこれを中央衛生会とした(明治十一年)。その後わが国の衛生行政の諮問機関と
して機能した。医学界の有力者が参加した。(注4) 佐藤進(注5) 五名士の一人、秋虎太郎(注6) 森篤次郎(注
7) 木村莊介：本多忠夫の上司で、海軍軍医学校前校長(注8) 五名士の一人、福本誠(日南)

森林太郎(1862.4.12～1922.7.9)文豪森鷗外。島根県津和野出身。住居は千駄木にあり日本医学専門学校
のすぐ近くであった。鷗外は東大医学部を明治14年に卒業したが、同級には中濱東一郎、佐藤佐、賀古
鶴所、小池正直らがいた。青山胤通や山根正次は鷗外の1年後輩であり北里柴三郎は2年後輩であっ
た。東京医学講習所開設の推進に大きな支援を送ったことが鷗外の日記から伺える。大正5年6月5日
には高田早苗文部大臣と夜に会見し(鷗外日記)、6月10日には島根県人学生、2名に会っている(鷗外
日記)。また、7月10日には学生代表(中本富太郎)と会見した(鷗外日記)。鷗外の上司で盟友でもあっ
た石黒忠憲も同様に支援をした。

海軍軍務局長、医軍総監、本多忠夫博士を

「実は先日藤井君を頼んで秋さんの処へも参り己の意のある処も秋さんの意のある処もはかった。大
いに同情し陰になって尽す考えである。先日中央衛生会で医学の^(注2)大家とも話したが学校の利もあるとの
事であった。まあそれはいいとして、此度の^(注3)柳光亭の会に出ることは許していただきたい。承知の通

り、軍籍にある身だからそんな会に出るのは困る。で自分の意のある処は佐藤君も宮本君も石黒閣下もよく知って居るから伝えておく考えである。勿論、佐藤さんの立つてくださる事は至極賛成である。それも申し上げ、かつ佐藤さんへも勧める考えである。何卒悪しからず許してもらいたい。」

(注1) 施療病院事務長・藤井庄一郎(前出) 『奮闘の半年』には7月5日の学生会議において、「昨夜も本多忠夫博士より使いがありて尽力せらる旨ありたれば」と秋 虎太郎が述べている。(注2) 中濱東一郎博士 (注3) 柳光亭は両国柳橋にあった有名な料亭である。ここで後援会有志者の会が開かれたと推測される。中濱東一郎日記では、「旧日本医学校生徒の為に学校新設するに付き、有志者両国の某亭に会す。余も本日始めて之を知りたるか為出席するを得ず。」と記されている。(注4) 佐藤達次郎 (注5) 宮本淑 (注6) 石黒忠恵男爵

国論探題^(注1) 佐藤貝村氏を満月堂に「四谷」

「諸君は実に七十余日一糸乱れぬ整々とお働きになつて其曙光を見るといふ事は誠に結構なる事でありませぬ。近年に見ない快事と存じます。弱者の勝利といふことは六合広しといえども一寸見ない。其勝利をしかも、青年の手によりなつたといふ事は如何にも美談ではありませんか。

先日鎌田^(注2)慶応学長とお目にかかり談、日本医專に移るや学長曰く、『実に青年の意氣愛すべし、青年は然あるべしと。それも怖い学生にあらざして比較的穩やかなる医学生にしてかかる事業のなされしや、驚くの他なきと存じます。実に政府当事者は無責任のもので、談にはなりません。世人も随分やかましく申しましたね。』

実は先日も我社の者と他に少々千葉に出馬して政談演説をやつたのです。然も其あくる日は教育会があるので県知事始め小学校教員総出の有様。なかなか、千葉広しと言えど、ふるつた観がありました。その席上、口をそろえて大いに大隈内閣の非政を唱えました処が、小学校先生あたり大いに謹聴していただきました。ところが、翌日の教育会上、アル小学校先生壇上に立ち『実は昨晚の演説を聞き見るに、実に驚きました。東京のように新聞紙に見るのみにして、しかもかかる事は新聞紙は報ぜざるが、失政然かも渾とん甚だしき』と。会場大いに騒ぎたつ。その筈、国家教育を教える先生にありて、遂に間に人はいり、教えさとしてすんだという。珍しき事があります。

実は国論も五日発行ですが、政治の風雲を見ていましたのですが、例の大隈(注3)もみけしそうですから、近日発行する事にいたしました。何卒、材料を多く送って下さい。また話も承り度く存じます。大いに弱者の勝利と題し書く決心しております。勿論、学校のこと多く書くと発行停止になるかと存じて居りますが、かまわん書け、との事だそうです。6月30日までの事を書きましてその後は次号にまわす考えで居ります。国論も今節六千部出して居りまして、都下は申すに及ばず、あらゆる人に送って居ます。県知事、市役人、代議士、政治家、等。大いに社会に発表し出来ることと存じます。何卒尤後五分間こそ大切なれ。諸君の努力ありて文教の改革、社会国家のため、ご尽卒あらんことを。併而、御成功を祈ります。」

(注1)原敬を首脳とする政友会の機関雑誌。大正5年当時は高橋琢也が社長を務めていた。(注2)鎌田栄吉(注3)大隈重信

大正5年7月9日

茅原華山先生を駿河台東京評論社に 七月九日

「やあ、おいで。一寸失敬するで。大に習字を練習している。六十の手習いという事があるが、まだ六十には今少し間があるから書家になれるであろうではないか。ハハハハハ。」

「いや先生は大家だそうで、書画、骨董、雑誌で相見いたした事があります。」

「いや、それは渡邊華山であろう。華山違いで。まだ骨董には未だなれんよ。ハハハ。」

「先生は今度洋行されると伺っていますが御目出度存じます。」

「ありがとう。然し行くか行かぬかまだ不明だ。三千円いるでね。どうだ磯部に九千円やらずおれに千円程くればいーにね。時に、今日の中央新聞に一寸見たが、明治大学に引受けるとや事実かね。」

「いやそんなこと承っていません。それはまた磯部の手段でしょう。」

「それでも北里(注)の慶應、青山の早稲田とおるでこれがうまく行けば結構な事だと思って今電話をかけた次第である。そうか生活別条ないだろうね。まあ、もう一枚書こう。書けば一段と上達してくるようだ。」

「時に先生、甚だ恐れ入りますが一枚書いて下さいませんか。」

「よーし書きましよう。一寸まって下さい。風呂に入ってそれから書きましようね。これは甚だむず

かしく、なれぬから他のを書きよう。

山生彼岸望落花一 御帆拳曙光 知意西方夜猶墨白 輪光照太平洋 海上眺望

崑山廉

天地垂国春 一元崑山

青山豪一君に

「また大井へいらっしやい。幾枚でも書いてあげる。洋行の作はこれだ。なかなか難しくくてね。」

何願読書為 志大地 喜君生四十台

春風匂囀 新局人雖 老志殖前

賢道不家 大陸畑産府新虎

築時正国産 英雄重物執筆

遊宸宇裡 国唯形久寸功

震度々志徳 崑山茅原廉

「さーお待たせしたね。」これから行きようと帰途につく時に、「此度は内閣瓦解だね。うれしくてうれしくて、大隈内閣はおれの仇道だからね。おれに二千円やるから博師に賛成しろ。何か君、よく考えて見てくれ。二千円位に永年の主意を曲げられるか。それがため万朝報出たのだからね。どうもおれは虫がすかん。勿論同志会がいやなのだ。此度は政友会は入らないとしても、否、何の縁をつなぐであろう先ず宰相には寺内か西園寺さん。平田がのれば内相だね。仲小路、^(注2)田健の^(注3)大蔵かね。後藤の^(注4)処置が一寸わからぬ。これにはこまるね。先ずもつとこいが朝鮮総督で、然しこれには陸海軍大将とあるで官政の改革せねばならぬのが面倒だね。実に愉快だね。またのひまに駿河台にも来りや。失礼する。又決まり次第しらせてくれたまえ。」

(注1)北里柴三郎 (注2)中小路廉(同志会のち脱会) (注3)田健次郎 (注4)後藤新平

前代議長 福岡新聞社長 福本日南先生を丸山新町に



今夜、琵琶を弾く人が来るからききに來いと案内(注)あつたため、三輪様他二人と共に。來客二人、奥様と令嬢等。琵琶は薩州出身の者。学生により。先生の作。旅順に。その他。蓬萊山、仏法もの。

先生、切々状に。「薩摩琵琶は薩州の本場に限るね。どうも東京の人々などは美して聞こえて感情が更にならない。筑前のいーところは荒神祭りにかきたてるあの琵琶だねー。どー声何ともいえぬ風情がある。」又近頃、何とかかんとかいりいろの説も出来るようだが五弦なんか柳琵琶は昔から4つの緒とあるわね。」いろいろと話は移り移りて、「おれは小敦盛なんかすきだね。」

たまたま來客の一人、「近時、實業の世界にフランス人の魂を出してくれとありますが。」と申しかけると、「いや仏人もナポレオン一世の時代が花で今はまるで婦女子の様ですね。生來、私の巴里に居る時なんかも仏人の魂まるで話になりませんでしたね。これでは戦争に勝てないと。丁度、盛夏の候、兵士の日炎病にかかる者数知れず、風儀整わざる者多くありました。どうも仏人は男子の勇がないように

すね。仏国でも立身し、また男子らしきは。しかしいずれですわね。ズー・カールーの如き、これはナ
イトの後裔と存じます。日本でいう源平氏時代の如し。平ノ清盛、源ノ義家の如く、ノを入れたもので
す。これはまた独逸にても皆つけていましてね。

それにつき、大砲の事を国つぶしというが、これが初めて種子島に伝わり、大いに国に入れたもの
で、これがために今まで禁じていたクリスチャンを信する様になりました。クリストのために大砲、銃
が輸入出来るのですからね。そこで国くづしといったものです。」

(注1)三輪新一(日本医専の旧4年生学生、福本日南と同郷の福岡県出身)か。

大正5年7月12日

帝大教授、近藤外科部長博士を駿河台に 七月十二日

「ああそうですか。午後如何と思つていましたがそれは都合がいいです。新設より他はないでしょうね。教授なんか何でもない事です。二週間かけとけば選んであげます。校長には佐藤(注1)さんは何よりですね。うん、ポリクリには築地の施療病院(注2)なんか。只患者を診せてだけはくれるでしょうね。それから浅草の療病院、何とかいう偉い婦人が経営していたが、今はたしか呉健君(注3)がやっているはずだ。それには百名余りの患者はたしか得られます。これは悦んでやってくれると思う。別に差し支えなかつたら、三十分でもよければ、くり合わせて出ましょう。早く授業開始したほうがいいね。」

応接間は未だ東京一との評あるだけ立派ですね。入口から、大理石で塵ひとつもなく、大沢君(注4)曰く、「この上を下駄で入つてもいいのですか。」応接間は十六畳くらい。虎皮をしき、ブーツこの上をスリッパで歩いてよきか否か、いろいろと相談した結果、ぬぐことといたしました。先生ははいて、ブーツなかなかふるったものです。

(注1)佐藤達次郎 (注2)東京市立病院であるが、海軍軍医学校の研修病院でもあつた。院長は海軍軍医学校長の矢部

達三郎が兼任し、事務長は東京市の藤井庄一郎であった。(注3)東京帝大内科学教授(注4)大澤文雄(日本医学専門学校1年生)、長野県出身。近藤次繁教授と同郷であるので同行したか。

近藤次繁(1865.12.1~1944.3.4) 長野県松本市出身。1890年に東京帝国大学医学部を卒業。同大学の外科学教室(スクリパ教授)に入局し、外科学を学ぶ。ヨーロッパ留学をへて同大学外科学教授。日本外科学会や日本臨床外科学会の創立に尽力。日本医学専門学校を総退学した学生団の後援会に5月の時点で入り、応援したことが「奮闘の半年」に記述されている。

大正5年7月12日

医学博士、南大曹先生を 木挽町胃腸病院に

「どうも学生の為すことは徹底していないと思う。先日も五、六人会合の上で話が出て、皆同情しているが意思が不明。其人これにてせんだう者がいてかくしてる。吾人等はかかる意なきと。然る者に手

を下しかねると。どうも徹底していないように思う。又かく新設の思付はいい事と思うが君必ず秋さんが経営できるかね。意は充分あるかね。そして又かかる相談会に出席さるる人は必ずこれまでの教授に御話しさる事と思う。ですから諸先生に同意を得なくてはならん。一体先生が学生に同情するならば、学校をよすが相当で、そうすれば自然消滅するはずである。おれも中学時代に紛争やつて退校にもなりそうでにげ出してよく味わってきて、諸君には同情する。社会の人が十中五まではかかる誤解を持つているから、これをとかねばならん。そうせねば同情がない。復校せられない理由も明らかとなった。よく分かりました。出来得る限り尽くして上げる考えである。」

南大曹（みなみ・だいぞう）（1878～1945）福島県出身。明治38年に東京帝大医学部卒業。ドイツに留学。帰国後、南胃腸病院を開設し、日本消化器病学会会長、癌研究会理事長、日本医科大学教授を務めた。

衆議院議長、島田三郎閣下に、麴町の自邸に



「どうもお待たせ申しました。其後どういたしましたか」と例のお世辞いい言葉で座敷となる。六畳の応接間にて面会の榮をたまう。一大帝国の国会議長さん。「佐藤注しさんの御話もあつたが、いかがなりましたか。ハ、そうですね。何しろ老先生は業なり名を立てて隠居の身ですからね。先日の水戸文公の記を送つて下さいました。かように麻生の別荘で青年時代よりの著を集め、或は筆に余生を送つていらつしゃいますかと。今更係争後の学校にはすえかねますね。一時だれかが校長をやつときまして其後で名誉校長なんかにするは至極結構と存じます。然し秋君がかくもやってくれば何よりですね。其は一人に信頼してどうしてもすくつて下さいと頼むのです。五人のうち大角君は信意ある実行家と存じます。高橋、寺尾、福本君はいわば過去の人で評論家ですね。大いに協議をしてもらわなくてはなりません。一定の年限をかぎり経営してもらうのですね。磯部の方はいかがいたしましたか。何分困つてい

ましようね。これは次然消滅となるでしょう。早く手を切るのも一方でしょうね。文部省も手のつけようないのでしょうかね。真泉病院もとうとう売却となりましてね。そして滝沢まで発狂いたしました。病院の収入は月千円位はあるようですが、何分そのほかの借金があったそうですからね。そして「めかけ」妻二人も内において内派も面白く行かなかったそうです。いや諸君が忍耐して来たから結構です。始めは真に幕に幕で答え、学生三分、当局七分のけんかでしたからね。これで同情も集る事と思いません。学校の先生方がしていますか。諸君に同情をもっていますましようね。」

(注1) 佐藤進

島田三郎(1852～1923) 静岡県出身。沼津兵学校、大学南校で学ぶ。明治14年に東京横浜毎日新聞社に入社。第一回衆議院議員総選挙で議員になり、連続14回当選。大正4年には衆議院議長に就任。毎日新聞社長として、足尾鉍毒事件や廃娼運動を取り上げる。1922年(大正11年)には犬養毅、尾崎行雄らとともに革新倶楽部を結成した。

医学博士、回生病院、中濱東一郎先生を病院に（電話）



「今日は如何なるお話ですかハ。丁度、今日は差支えありません、会(注1)へは出られませんね。一体いかなる会(注2)です。ハハ、高橋様(注2)や君から電話が来たし何しろ鎌倉に行きましたね。昨夕かえって来た次第です。それで昨日午前九時来て下さいと申して置きました。その話で来るんですね。

そうですか。それは佐藤(注3)さまなら一点の比難もない事ですがね。実は午後一時から内務省の中央衛生会へ是非行かなくてはならぬ。それから時間があつたら参りましょう。

どうです。9月から仮の校舎で授業を始めては。教授なんかすぐ作られます。そしてポリクリはあちらこちらの病院を願つてやつては。それがいいですよ。そうすれば是非建設せる事となります。磯部が評議員なんか。已れはそんな者ではありません。どうぞ安神してください。此の病院なんかつかつてもい

いですよ。その位の事は思っていました。諸君には同情に堪えません。」

(注1)柳光亭における学生後援会会合のこと。この会で新校開設が決定され、7月15日の学生への発表になったと考えられる。大正5年7月13日の中濱東一郎日記では、中濱はこの会に参加できなかったことが述べられている。(注2)高橋琢也 (注3)佐藤進男爵

中濱東一郎(1857.7.7～1937.1.19) 東京出身。中濱、ジョン万次郎の嫡男。森鷗外、小池正直、賀古鶴所とともに東京帝大医学部の同期卒業(明治14年)。ミュンヘン大学医学部衛生学教室(ベッテンコーフェル教授)に留学。緒方正規、森鷗外、小池正直らもベッテンコーフェル教授に師事している。日本衛生学のパイオニア。東京牛込の回生病院や鎌倉病院の院長。ジョン万次郎の故郷である土佐に愛着がつよく、日本医学専門学校の高知県出身の学生の保証人であり、早い時期から学生団に同情を寄せてくれた。医学の世界から親友森鷗外とともに、東京医学専門学校開校に向けて大きなエールを送り、開校への支援をした。東京医学講習所の開設にあたり、顧問および内科学教授となった。当時の学生は中濱の経営する回生病院で内科の研修を受けている。大正7年に、回生病院を東京医学専門学校へ移譲したが、現在の東京医科大学の校門には当時の病院の石づくりの門が一部そのまま残っている。中濱東一郎日記(富山房書店)の内容(前述)から長委三美が中濱東一郎へ電話をかけた日は7月13日朝であると特定される。

東京市主事、藤井事務長(注1)を施療病院に

「先日は失礼いたしました。貴君から本多様(注2)へと電話がありましたから、私よりもかくかくである。実は、日本医専の学生総代が参つて御願いするはずで御座いますが、かえつて御迷惑と存じまし、又折角の交通機関で甚だ恐縮するとの事で何時かお目にかかれようや、電話で御尋ねいたしますそうです、と前夜申して居ました。私も今節決算報告があるのでどうも参る暇もないので失礼いたしております。

どうも本多様は軍籍に身のある御方ですから、表面に立つ云々はむずかしいでしょう。然し学校のため御尽くししたいと存じています。貴君方に御目にかかりました翌日、本多様の使いとなり年来の御礼にと秋様の御内に参りました。いろいろと話も出ましてな。煙も出て七時頃からとうとう十二時近くまで話しかえりました。なかなかの決心で秋さんも二、三十万円の財産ではあるが、この件のためには出来得る限りやつて見たしとのこと。『貴君は金で、私は一文なしですから身体一つを』といつてかえりました。私も元より微力ながらお尽くしいたします。

若い時分から随分尽くしておりますから借金を学校にかえず決心です。林伯爵家に対してもその当時十二万円の礼をするかと申されましたのを一銭もとっていません。十二万円出すから頼むといったから、決然と立つてかえつたら、すぐ老爵馬車にて来り、是非頼む、この老人が雨に濡れかかかりてるを哀と思えば(戸を)開き入れくれとの言葉。

それから又、大岡育造さんなどと尽して美しくしました事もあります。これは銀行済理したのです。津久田忍と申す今も有名です。これが壮士二、三十名つれ来り、金云々でなかなか承知せず。遂に『実はそれなら壮士四、五十養うに困るからこの金五百両程出せ、出さねばこれでもどうか』と、八寸の大刀を畳に立ちての膝詰め時に、『この藤井の命あらば必ず訴える。まさか五百の金に令名ある君は犬死するはかわいそうである。よろしくおれを殺し、然る上でこの金これはないと取るべし。』これにはさすが困り、『実に恐入りました。君は二十一、二にしてかかる豪胆あり。さすが銀行済理もつくべし』と引き去ったから、すぐ金五百を引出すよう切手をやって『君の弟子のうえを悲しむ、ねぎらい給え。』とやった事があります。かかる事を随分沢山やっているから、その札を学校へつくさしてやります。何卒然るべく。此の方は静岡事務員ですが、関金太郎先生の弟子です。後援会にいつてもらおうと存じています。又何れ様子も伺い。用事ありましたらいつて下さい。何事でも御使いたします。』

(注1)藤井庄一郎 (注2)本多忠夫 (注3)秋虎太郎

大正5年7月15日

高橋琢也先生、休会のため学生一同に挨拶して曰く。時に七月十五日

於鈴木亭にて

「承れば諸君は本日より郷里に居らせらるる由、しばらくの間袖分かつ事となります。就いては何か一言申してくれるとの事で参った次第であります。今回諸君が御帰省なさるや諸君にとって業終え、錦を着て古山に帰らるならば、この位満足愉快なる事はないと思います。然るに不幸にして学半ばにして思わざる障害のため業や中途にして前途の方向も如何やと憂慮しつつ帰郷するので誠に諸君の哀惜は察します。不愉快に存知ます。これがため、諸君のみならず父兄、親戚、知友皆不愉快を感じられることで遺憾なる事であります。然し前途は果たして憂慮すべきか否や。これがため吾々同志の諸君のために目的を達せられる方法を講じつつあります。処がどうやら目的を達する事が出来るようである。天高く読書の頃になったら新教授が出来ることと内心楽しんでいきます。

一昨日はアル会合(注)に行き、やむを得ず昨日会(注)した。元より医学の大家で立派なる病院も持ち年齢も学識も充分なる先生。医者は古きを良しとし薬剤師は富んでなければならぬ、理髪師は若きを良しとす。昔から医者とかぼちゃはひねた方がよいと。然るに其人は深く同情されており、前校長にと行った事のある人だそうだ。新経営はあまり困難ならず、場所さえあれば教授はできます。それですから講義を

9月からやつては。機械も医者ももっておれば。ミクロスコープはかりる事もできます。病院は御使いになっていいです。教授不足なら私も出てあげます、となかなか同情してくれました(中濱東一郎)^(注3)。

また、一方、秋さん^(注4)は経営の任にあたり、此事もなると思う。故に諸君は前途、さまでに憂慮せられないでいーと思う。帰省後は父兄、知人、親族の方々に心配されぬようよくお話しになった方がいいと思う。

先頃波津久某君の尊父が此事に関し絶命されたという事を聞きましたが、かかる惨状が又とあつてはすまぬ事である。どうか御心配をかけぬ様祈つております。同時に十分に忍耐してどうか静かに郷里に静養せられん事を。つい青年の時代は当人も活業にはやるものである。不愉快の事があると知らずしらず烈きものであるから、十分に忍耐してもらいたい。

楽翁公^(注5)が曰く、浅野内匠頭が煙草一ぶくきざむ間待てばかかる事は起こらなかつたのである。又この手紙は急ぐからゆつくりと書いてくれという事がある。ドイツの金言にも「時は医業」なりと。時間は最良の医薬と。これは私の老婆心のみ。いずれ人間が社会に立てばいろいろの障害があるは当然の事でありませぬ。社会に頭角を表す人はいろいろと艱難苦勞せざるべからざる。曰く、青年は四回まで失敗せざるべからず。人は如何しても苦しませればえらい人とはなれず。今一層進んで、青年は四回まで失敗し得ると。今回諸君が一回かかる艱難不幸に遭遇した事は実に前途の成功と位す。大器晩成と心得て、充分に休養なされ健全で居てもらいたい。健康は美事の基とやと。私は大に切に諸君の健在を祈り、又

九月の好時節に再びにこにこで会合せん事を。」

(注1) 7月13日夜の学生後援会会合のこと。両国の某料亭での会であったが、中濱東一郎は中央医会へ出席したため参加できなかった(中濱東一郎日記より)。本多忠夫の話からこの会合は柳橋の柳光亭で行われたことが推察された。(注2) 中濱東一郎と会ったこと。(注3) 「奮闘の半年」に述べられていないし、東京医科大学50年史でも記載されていないが、長委三美は中濱東一郎が東京医学専門学校の開設に向けて全面的に支援、協力したことをここで明らかにした。(注4) 秋虎太郎 (注5) 松平定信：白河藩主、江戸時代中期、寛政の改革で知られている。

法学博士、寺尾亨先生

「只今、私等の年長者・高橋先生がいろいろと御懇厚なる御話があつた通り、尤阜、一言もつけ加える必要はありません。蛇虫であります。一寸、ご挨拶いたします。前申された通り、学科の方でもかかる望みあり。秋さんは引受けやるとの事でどうやら望みが立った様です。ついては一寸申しておきたいが、誰が引き受けるのだ、だれが教授業を世話するのだといろいろとせんさくをしたりいろいろと申されぬほうがいいと思う。諸君は休暇で帰郷なされていろいろと余り心配されぬ方がいいと思う。然しながら余り意気軒昂も考えるべきと思う。どうか静かに心を満足せしめて健在を祈ります。かりに此事ならずとも今日の意志薄弱なる世に於て人心のやかましき御世にありて此青年がかくも正義に叫び七十何日間の一糸乱れざる団結は実に青年の亀鑑と満足せられて実に結構なる事と思う。どうしの身神を鍛錬し諸君の健康を祈る次第であります。」

前福岡新聞社長、文豪 福本日南先生

「えー、只今高橋先生がいろいろとご懇厚なる話があつて更に申し上げるは蛇足であると寺尾先生が申されたが、更に私が申し上げるは、蛇虫のまた蛇虫と思う。只お別れの挨拶だけしようと思う。今休会せられる事は賛成であるが、如何にもこの頃の天気は移りかわりて、天気にあるやら雨になるやら。然し梅雨も去つたからきつと晴天に盛夏し、益となるべきであると信じます。一体私は物の思い切りのよいほうであるが、昨今のように生活難切なる時に徳と利と害のみを思えど、かくも七十日間よくも忍び耐えて、尤始の考えを通し、然もよわそうな医学生にかかる精神は実に前に前途望あるを感心に堪えません。又、今日から帰郷せられるは此までの日本医専にあいそをつかし帰らる事で、二度と足を入れんという決心を含むと思う。依つて益、私ただ尽力せんと思う。日本人の熱中はよくラテン人に似ると。時局は恐れをけすと。集まつて居る中は、元氣天に満つ子も、散らば勇氣もなくなり日に疎くなるが世の習いである。又誘惑もいろいろと方面をかえて来る事と。世間の邪悪は必ず欠点を見、必ず真正面より来らず、横よりくるものである。精神試験はよく切角の正義のために。この正義は一貫せざるべからず。さらば古山にあらせられても精神の修養につとめ、如何なる諸悪来るとも最初の御血に対し、血に笑われざることを祈る。残らる委員は責任は大にして注意あらん事を。此三ヶ月は実に勝敗の分かれ目で、3ヶ月間には勝利の目鼻つく事と思う。ここがベルダン戦である。地球戦である。ドイツ

が勝つか。連合軍が勝つか。楽観も悲観もせず、ゆったりかまえて、十二分の注意をもち勇戦されん事を切に祈ります。何卒諸君のご健康を祈る。」

(注1) 欧州戦線での激戦地

大正5年7月17日

慶大教授、向軍次先生を下渋の田荘に 七月十七日

「其後学校の件は如何になりました。ハ、それはいいですね。思っていたよりも良くはこんで結構です。文部省もいこじのない奴ですね。すべてそんなぐあいですからね。」

「時に先生、先生は本にうづもつては御勉強ですね。」

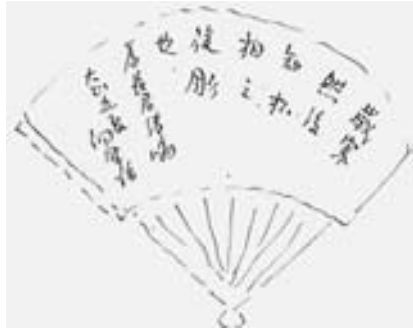
「ソウ、それでもないですが。然し、何をいつても本は読まなければなりません。日本人で日本語かえって出来るのですからね。夏目漱石などまるきり駄目です。小波^(注1)、これも始めよりいかなでしたね。」

話も小波よりよくする人はいくらでもありますよ。日本語が出来なくてどうして外国語が出来ますか。外国語に達せんにはやはり漢文をしつかりやるのですね。孟子か史記がいちばんいいようですね。これを当分やって然る後やるのです。ですから私がローマ字を始めたので。これは私が仙台に居たころから大いに称えたものです。ところが言文一致と二つとなえてはどちらも通らぬと困るから。まあ、ローマ字は後にしようと申してかくなっています。時は明治三十五年。明治三十八年始めてこれを世に発表した次第です。今ではこの説が世界に通るようになりました。然し盲目な日本の文部省はなかなか採用はせないでしょう。小学校教科書に就いてもこの通り文章を誤っていますわね。これを変えろとひと所申してようやく一所訂正しまし、後は一寸で修正しませんからね。ローマ字も大分世の中が目を開けて参りました様です。どうしてもやろうと思っっています。国語その他すべて精読でなくてはだめです。いわゆる昔漢文をやった様にしたいがいですね。」

「時に先生、幸御染筆お願いいたします。」

「よろしいあります。うまくは出来ません。」

歳寒然後 知松柏之 復彫也 為長君尽扇 大正五夏 向軍次



「先生は慶應大学に週二、三時間の教鞭とらせらるるに、月三百円。」
先生曰く、「世界的学者をして月三百円とは余り安っぽいな。然しこれも文教の為か。ハハハハ・・。」

(注1) 児童文学家、巖谷小波

医学博士、呉健先生を麹町富士見町に

学校の件につきましては面会せずと申さるを再三願って面会の榮を給う。

「勿論学生諸君には同情いたします。然しここに学校を新たに作る事はなかなかの困事ですね。そしてかかるまで委員でやって下さるならば、委員に任し、余り学生として訪問よされた方よろしいと存じます。学校は如何なる状態でありますかね。又学生は学生として勉強したほうが社会の同情がありますよ。そして私のような中位のものに後援せろとて、何も出来ませんよ。何たる動もない事と存じます。そしてここに新たに学校建つとして各級に入学出来ますかしらん。私は恐らく出来ぬ事と存じます。すべて良く考えて、世に曰く、せんだう多くして山上げるでは困りますからね。そして又、私は大学でその日を追われてる位で、なかなか諸君のため尽くす事、是微力で又暇がありません。」

呉健：のち東京帝大医学部内科学教授となった。

海軍中将、中尾雄閣下を麻布右永町自邸に

「先日大体、高橋さんから話になり、『五百のため、殊に県の後輩の困っているというから、どううかして助けてやろうと思う。ついでには後援こそやってくれまいか』との事であつた。『元より同情もいたしますし、諸君のためなら出来るだけは尽くしたいが、微力でまた金で如何しよう事は出来ません。名望ある完全なる高橋さんの下に就いてなら何でもいたします。』と申したくらいで、『とにかく名をかしてくれろ』との事でした。そして大体尚学生から聞きくれとの話でした。新聞でも見ていたが、概略承りましょう。よく解りました。実に同情にたえません。今申した通り、金銭で名望は尽くされませんがそれも良し。用向きがあつたら大いに尽す考えです。」

御食に賜りし。アイスクリーム、砂糖かと思えば塩なりけり。先生曰く、時間すぎて腐りはせんだらうね。石を持って遊ばる仙客三人。

中尾雄：広島県出身。海軍兵学校卒業。海軍中将。

逋信副參政官、(注一)荒川代議士を飯田町の望遠館に

さすが望遠館存じ候。東条万町を一目の下に、万、十万、百万、千万の灯火空天の如くに集めて。

「いやその後どうなりましたか。先約の客があるが先ず先に面会いたしましょう。大略に願います。」
大体に吾等の方進秋さんの決心を話した処、

「秋さんは財産家であるか。」

「まず二、三十万円あるそうです。」

「それなら出来ような。」

「時に承れば先生は妥協説に賛成なされ、評議員となつて下さつたそうですね。妥協なる物はかくかくの物が申しかく相成つとります。何卒よく考え下さい。」

「そうか、それはいい事をきかしてくれた。じつはおれが名を出してすむことならいいいなしと申した位の話だ。それは乗せられたな。まあ出来るだけ尽しよう。秋さんによろしくいつて下さい。一面識はないが聞いた名の人である。」

(注一)荒川五郎(前出)

大正5年7月18日

逋信大臣、後藤新平男を宮村の邸に

七月十八日



今しも面会している人はいざしらず、自動車庭前に三車面。応接間ここは八畳さすが。ルーズベルト、^{注1}児玉大将の像。ここにも厳しき来客四人。また来る婦人乗したる自動車あり。婦人は二週^{注2}に通されぬ????。

「其後どうなりました。」

「御蔭でどうやら目的が達せたようです。」

「それはいい都合でしたね。元より微力で何一つと申し、諸君に尽くす事はせざんだが。」

「結構です。」

「文部省の意向は如何です。」

「文部省は便利に取り計らうとのことです。」

「文部省の責や大であっていうまでもなく大に責任を果さなければならぬ。」

「今後なりとも大いに御後援を願います。」

(注1) 児玉源太郎陸軍大将 (注2) 二階の意か。

後藤新平 (1857.7.24～1929.4.13)：岩手県水沢出身。須賀川医学校卒業後、内務省へ入る。児玉源太郎陸軍大将とともに台湾の統治にあたり、民政の責任者として台湾の安定と発展に貢献した。その後満州鉄道初代総裁として満州鉄道の確立に貢献した。大正5年当時は通信大臣であった。関東大震災後の東京市長として東京市の都市計画を作成し、東京市の建て直しに尽力した。

大正5年7月18日午後7時

高島平三郎先生を西片町に 七月十八日午後七時



「学校は其後如何になりましたか。」

青山豪一君、立って曰く

「実は今日先生を伺いましたのは他ではありません。磯部さんの人格云々、学校の云々でなく、吾々は小学時代より、正は行い邪は捨つべしと教わり、日本医專に入學して以来、常にかく教育されてまいりまして、グルンドリイカイトなるものにより解決せんとし、又万一、我々の方失敗と終わりし時は誠に前途迷うもので其時は如何にすべきや。勿論正義の叫に身を終えるより他はないと存じます。実はそれを私淑していた先生より承るべく参ったのであります。」

先生曰く、

「諸君は正義、正義。正は何々、邪は何々と申すが、實際道德の智識が少ないと思う。諸君は始めの

精神は指定にあり。然るに中途より一点して磯部、山根に至れり。元より磯部、山根に責やあり。兩人の不徳のなすことと思う。此により私も勿論不徳のいたす処と思ひ、学校も辞職いたした次第であるが、諸君は磯部、山根の事はいいではないか。学校の間は、学校の為否、学問すればそれでたれりである。中間宿主であると思う。それは学校卒業後するべきであらうと思う。盟約を破れよとは申せんが、血判したとてみなのためなら何でもいいではないか。その方が君らのためと思う。

実は今話しを聞きへんに思った。先日、学生三名来て、妥協なりまして学生一同これに満足する事と相成ましたのでどうか学生達の協議人となって下さいと。その翌日、山根と斉藤と関と自動車にて来る。元より学生の事にして一日も早く解決するならば結構であると同意していた。まるで話がかわっていますね。荒川君が申す通り、私ものせられたのかしらん。然し、一旦承諾した者であるから、一日は会へ出席しようと思う。しかし、今はよく検討するから出席できないかしらん。其席上では意のあること申す考えである。かかる手段であるというなら、勿論成立は出来ぬと思う。然し学校建設はなかなか困難の事であるからよく考えなければならぬよ。」

(注1) 日本医学専門学校(旧) 4年生。岡山県出身

法学博士、慶大教授、気賀勘重先生を

麻布、下渋谷の邸に

先生は静岡の豪者の養子とやら。「かつて乃木将軍の静岡に行かるや。金をつくして御食せんとす。

将軍は実にかかる処へ参らず平凡の方よろしき。」と

「あ、よく解りました。形式にのみ取らわれる世の中ですからね。」

気賀勘重：慶応義塾からの初めて（明治32年）の海外留学生5名の一人。のち同経済学部教授となった。

東京府会議長、齊藤孝治氏を神保町に



「先生はご多忙にもかかわらず、学校の事件が起こりましてより以来、後援者となり、色々のご尽力くださいまして、有難う存じます。先日も懇々と閑様と両名にてお手紙下さいましたが、私どもの意と一致せず、何たる返事もせず失礼いたしました。じつは今日は、然るべく御礼を申し、尚先生がかくお働きくださるは、元より学生のために他ならず。然らば秋後援者と共に歩調を取りやつてもらったらと存じまして学生総代でなく、委員でなく、個人として参った次第であります。」

「二体、妥協案、妥協案と申すが、人によりいろいろの事申しまして、真意を置く事が出来ませんが、如何なるものでありましょう。山根、磯部はこのままと申す人がいるようですが。」

「は、そうです」

「諸君はおし出せ、おし出せと申さるが、財団法人ではあるが名のみで、実は磯部のものですからね。謂わば、ご主人を追い出すのですから、それは出来ぬ事です。」

前田氏は憤然として曰く、「かかる月日をとるまで犠牲を多く出さぬ時なら何ぞ。然し、其も今となつては到底できません。」

「あなたの申さるは真意でしょう。どうも一貫したことではないと思います。それは指定を取りに紛れ騒ぎで、今となつては山根、磯部をおっぱるなんては。君らの代表者曰く、指定来ても山根、磯部では復校せんと。実に解しません。露骨に申しますれば、医学生は暗いです。其代わり、一文字正直です。正義、正義と何の正義やら。盟約を破りなさいとは申さんも、学生時代の大切な時期を誤れん様に祈ります。」

「それでは申しますが、元より妥協説も美派でしょう。始めにおいて、何故に磯部がこれを入れませんでしたらう。また、処罰者は何ゆえに許しませんでしたらう。」

「それは實際この度の学校騒ぎでも、五、六名にとはまいません。かかる者を無条件で許したならば、又かかる騒動が起ると申して居りました。そして、今度は関君と充分考え、また先日も申してやりました。この件起こるや、元より不徳の致す処ですから、謹慎しておられたし。」

「そうですが、それでは申しますが、先に申したとおり、貴君も学生のためを思えばこそと存じます。故に、甚だ苦しくは存じますが、今、この案、いわゆる何時完全するやら不明の案をすてて、秋さんの新たに設立する案へ協賛して、一日も早く学生の学びしまでに尽すことに尽力してください。」

「それは然し、私の案の方が立派に成功するものと考え、近く協議員もきめ、会を開くはずです。学

校過ちはなきも、学生団に、江原^(注2)、高島^(注3)、荒川^(注4)先生等あり。理事もめっからず、そして秋さんがすると
か申すけれど、これは出来んと思う。」

(注1) 前田燐之助(日本医学専門学校3年生、愛知県出身) (注2) 江原素六 (注3) 高島平三郎 (注4) 荒川五郎

大正5年7月20日

貴族院議員、江原素六先生を本村に



「其後如何になりましたか。」

「実は、御蔭ですくすくと相成りました」。〔中村^(注1)〕「処^(注2)が妥協派より承りました所、その決議委員に御なりになったと承り、今日参った次第であります。」

「そうでしたか。先日、学生3名まいりましては、『ところで学生も一段落ちつき、まあ解決となりました。それは妥協説が出まして、学生は全部これに賛成し、近きうちに復校する事と相成りました。』
『そうですか。それは結構な事であります。青年は然るあるべし。これを入れ、復校とは目出度いです。一日も早くすみ、勉強を祈ります。』と申して別れ、翌日、山根正次、斉藤孝治、関幸太郎3名が参りになりました。そこで、私は『御目出度』とまず申し上げた処、『まあ妥協説で、これで学生も承知してくれそうですから、復校することとなり、好都合と存じます。ついでには是れ学生の方の評議員となつてください』と、度々申され、然し私の名のために五百の学生となればかく申す事も出来ずと、依つて承諾した次第であります。それも私の生活してる麻布中学校とよく似るのであります。

丁度私が代議士で上京した時の事で、キリスト教が入ってきた時はこれは禁すべきだ。曰く、学会よりこれを勅令で出だせろと。私は大に立つて、かかる事を勅令などより出したなら、実に上陛下にいますまぬ時代である。それは欧米の文明国は大にこれを宗教を奨励しているに、宗教で勅令で禁ずるなど。その時、島田君^(注3)など大に賛成してくれましたが、なかなか反対もあつて遂に可決したのであります。それなら検察院でと大に申し上げました処、勅令で出すことはよされましたが、省令でキリストに關係しとる学校は認可取り消しと相成つた次第で、私はこの法のことを思えばこそ、その土地二万坪

から金五万円を友人にかり、この校舎をかる事にしてやって参りましたのが、麻布中学の今状でありまして、よく似てると同情するのであります。

かかる事もあったから、比較的文部省にもよく私の事を解し、にくまれずすかれずにやってきました、先に文部省にも参り日本医専のこともはなした次第であります。で、一たん承諾しているから、^(注4)荒川、^(注5)高島さんと相談して何とかいたしましたしよう。^(注6)高橋君にもよくはなしましたしよう。それはどうも折角すみませんでしたな。実はすぐにかかる報告せんのが罪でした。先週も、^(注7)三宅先生へ、五委員と共にいつていただく処、ちようど御多忙中で真意を得ませんでした。あ、そうでした。」

(注1)中村徳三郎(2年生、埼玉県出身) (注2)妥協派とは齊藤孝治、席孝太郎らの学生保証人を中心とした日本医学専門学校に復学を考えた集りである。十数名の学生が途中より同調した。

(注3)島田三郎 (注4)荒川五郎 (注5)高島平三郎 (注6)高橋琢也 (注7)三宅秀

大正5年7月21日

農商務大臣、河野広中閣下を、大臣室において 七月二十日



九時農商務省に行き面会を乞う。九時二十分、閣下は二頭馬車にて来らる。直に大臣室にて訪問の榮を給う。

「今日恐縮より兩名は日本医専学生団を代表して吾々の苦衷を訴え、閣下の同情を得、御後援を得ん事祈願ものであります。」

五月一日以来より今までの経過を述ぶ。

「それはいい都合に参りましたね。文部省の意向は如何でありますか。は、そうですか。」
時に秘書官来り

「閣下、是れより会議を開きます。」

「それでは失礼いたします。お話しも承り、この団報も読んでおきて。」

河野広中(1849.8.24～1923.12.29)・三春藩出身。戊辰戦争に参加。明治維新後は東北における自由民権運動の魁となり、三春に三師社を結成した。1989年(明治23年)の第一回衆議院議員総選挙で当選してより大正9年の第14回衆議院議員総選挙まで連続当選した。大正4年の第二次大隈内閣では農商務大臣に就任した。第10代衆議院議長。

大正5年7月25日 早7時

茅原華山先生を大井の里に 七月二十五日 早七時



「あ、早かったね。おれは一昨晚よりげりして大変だ。今も湯に行ってきた。学校はうまく建つそう

だね。御目出度う。実は、昨日新聞でも見るし、原三郎君(注1)から手紙よこした。何れ来ると書いていた。おれも来月十五日(注1)か遅く十九日には(二十五日)よいよ出発する事とした。然しね、殆どに切符が売り切れだそう。然し出来るならば、国家のため都合するといつてくれる。行く様なら「はわい」へ一寸下だりて見たい。えーとニューヨークへ行く考えだ。此度は漫遊ではない。世界の智識を集めるのだ。実はこの戦争は大したもんだからな。そしてあらゆる智者、学者、政治家なるものが此ニューヨークに集まつてるのだ。この大市の片田舎に大井町があるだろう。戦後の日本を開拓すべく行くのだ。何時かえるか不明である。なんだか政変がありそうだな。どうしても駄目だ。隈侯は佳冠の意はないらしいね。ハハ・・。学校もうまく行ったね。弱者が勝った事となったね。日本医専はあれでつぶれるだろうね。これは致方なく、さめざめたものだね。」

「先生どうぞ記念に一筆お願いいたします。」

「よろしい。然し今日は下痢して書かない。昨日書いてみたが力出さなくて困った。書いておきます。大分たのまれて、大いに書くよ。ちよつと書くことができませんからね。」

(注1) 日本医学専門学校2年生。のち東京医科大学薬理学教授となった。

(注2) 茅原崑山はこの年の8月15日より2年間渡米している。

大正5年7月25日

中正会、^(注1)滝口代議士、^(注2)高輪中学校に

「度々御足労かけまして誠にすみません。それはいい都合に運びましたね。昨日は御手紙有難う。妥協派云々とありましたが、一体妥協なるものは他より考えると立派の様にも見え、又文部省としても学校本位であると私は考える。然らば、これの方早く成功は出来ませんか。学校経営なるものはなかなか困難ですよ。かくうまくいきまして私なんか元より微力でもあるが何らかのご援助もせず、度々の御足労に対し誠にすみません。で私としてもなるべく出来る事なら大いに諸君の為に尽くしたいと思っております。それゆえいつて来て下さい。その事を契っておきます。元より多忙で党内のことで今はおことわりしている次第であります。先ず自分の身の上のことをすませ、然る後にやるべしと信じてやつてる次第です。早速君も先日帰り二十三日にくるはずの所。両三日は来られんよう手紙くれました。向うの様子やつているのでしようよ。」

(注1)尾崎行雄を党首とする政治団体、のち大隈重信の公友倶楽部と合同して憲政会を結党した。

(注2)瀧口了信(前出)

前農商務次官、和田彦次郎氏を麻布霞町の邸に



「三人さんも広島様ですか。いや私が広島様です。皆かえりましたから。」「実は代表の意で参りました。」「そうですね。一体学校は何処にあるのです。又磯部氏は博士ですか。人格は如何なる人ですか。ハ……。そうですね。実に同情いたします。私は先年女子学院に生活してとんだ目に会いました。伊藤さん、^(注1)土方さん、平山さんと私で遂にさしおうさい(差押さえ)にまで会い、五万の判をついたがためでした。遂に十万円になりましてね。あと平山さんがうまくやってくれました。^(注2)高橋さん はなかなか知られていますからいいですね。^(注3)尼子さん、^(注4)呉さんによく会いますから、いろいろと話して後、表なり裏になり後援いたしましょう。」

(注1)土方久元伯爵 (注2)高橋琢也 (注3)尼子四郎 (注4)呉秀三

和田彦次郎 広島県三次市出身。農政の大家。農商務省次官を経て貴族院議員となった。

医学博士、額田豊先生の額田病院に



「其後いかがいたしました。うまくいったそうだね。中濱さん(注1)が校長になるとか。びっこさんも困っているだろうね。僕も忙しくて会わないが一度会ってやればと思っている。学校を建てるといつても、さまで困難ではない。教授などは少しもむずかしくはない。僕も一週間あまり旅行して昨日かえった。岡山医専で二日暮らしたがあすこなど皆若手だ。学校出で二、三年の所が教授してる。今度学校建つとそれ式にするがよい。そしていわゆる専任にするのだ。そしてその上に一人が大将を置いて一週に二、三時間出てもらえばいいからね。其時はうまく組立ててあげる。

中濱さんも文部省にもきれて医学のオーソリティーとして非類のない人で立派だ。佐藤さん(注2)は大学時代よりポートでよく知った人だ。無能の人ではあるが人格の人で校長として実に立派だ。老佐藤先生(注3)でなくて立派だ。そーて順天堂から十万程出さすがいい。赤坂の分院もはまらすがいい。その時はおれもすすめてあげる。何しろ順天堂は十六万円と申すのだ。只今は少なく七十万円はあるよ。大したもの

だ。凶無しくきれこむというのが金造りだからな。

青山さんあたりへも行って見るのがいい。青山さんへは僕からもいつてあげる。明後日からは隔日にあう事となるかと。青山さんは人物だ。あの人が出ては大学に人がいなくなるはね。早稲田の医科が出来たらというが、これも風説注4だろう。大学ではまあ大澤岳太郎博士注5にいつて話してみたまえ。この人は校長位なつてくれるかしらん。適任かしらん。」

「此頃教育調査委員の御方を訪問していますが、如何なる人がいいでしょうか。」

「それはいいですね。後援者に二、三人入れてとく必要が大いにありますね。松木千之氏、この人はなかなかきけてるし、よく案も作るし、しゃべられるようで、この人を入れる必要がある。それから、小松原叡太郎氏、この人は岡山の人で野人である。尤もあばれた人で、此度の件に適任かも知れん。新聞社長もした人だ。僕でもたのんであげる。菊池大麗男。この人もいいですね。大学案を出した人。よく似てるわね。これによく似た案を僕は三年前、無名で配布をしたことがある。よく似てる。鎌田注6さんもいいだろう。頼んでみなさい。

一体今度は誰が。参謀がうまくやるね。そして団結の堅固なることには感心注7の他はない。何日か褒めようと思つている。実に美しいものだ。そして何時の日にか立派な人物がでるよ。何時の日か、この事が利用されると思う。」

「べつに益したこともないようですが、ズーズーしくなりました。」

「それがいいのだ。僕なんか洋行は三年したが何も得たものもない。ただズーゾーしくなった限りだ。一体日本人はズーゾーしくないと行かぬのじゃ。何時か演説して見ようと思っていたが、まだする機の出来せん。どうか大学出は形にはまられてしかたがない。どうも形になって偉い人は出ん。将来も出まいと思う。かかる意にて、かかる学校より千人の中、ただ一人でもよい、立派なる人が出たらそれでいいと思う。百人が百人一合柙より、百人に一人一石柙が出たら、それこそいいのである。また、私立の学校よりはよくるのである。きつと日本医専よりは形にはまらぬ一石柙がでると予期している。この意味からいって磯部(注7)はえらい。私はよくいつていた事がある。大学時代ボートをやるとき、これを何時か利用する。団結と統一心をと。果たして運動家は世渡りがうまいようだね。大いに得る所あると思う。多くの人うまくやっておる。」

(注1)中濱東一郎 (注2)佐藤達次郎 (注3)佐藤進 (注4)青山胤道 (注5)東京帝大医学部生理学教授 (注6)鎌田栄吉(1898～1929)。和歌山県出身。明治31年4月より大正11年6月まで25年間慶応義塾塾長として慶應義塾の経営に貢献した。(注7)磯部検三

額田豊(1877～1972)：岡山県出身。明治38年、東京帝大医学部卒業後、ドイツへ留学。大正14年(1912)5)、帝国女子医学専門学校(現東邦大学)を創立し初代校長となった。日本大学初代医科学長も兼任。東邦大学初代学長。

東京市伝染病院に医学博士、二木鎌三先生を^(注1)

「えー、なるほど。そー。ご尤」の調子で、経過は聞き下され、時々先生独特の複式呼吸。ながし、なかなか一言一句もおろそかに返事されぬ風調、当世一流の内科の大家。「新経営はなかなか困難ですわね。諸君は日本医学専門学校学生にあらず、私は日本医専の教授である。そこで第三者として申すなら、時間があるならば、新しき学校に出てもいい。勿論、日本医専にも出ようとは思っています。学生が少ないから出ぬということは出来ませんわね。始めは何だか教授としての取扱いもないようであったが、これは青年意気の致す所で、何時までも腹藏にはなし。いわんや、茲に新たに学校建つに於いてをや。」

(注1)明治12年に東京府が伝染病のための「避病院」として臨時に設立した。同じ敷地に常設の隔離病院を建設し、伝染病院となり、その後駒込病院となった。

二木鎌三：駒込病院院長。駒込ピペットの開発で有名。

衆議院副議長、早速整爾君を中正会本部に



「君時間を正確ニ守ツテ呉レナイト困るぜ。三時とあつたから僕は待つて居た。四時から出掛けナイトイカヌ処があるぜ。話モ従ツテ出来ナイ。三十分位話ヲ聞コウ。一体ドンナ様子カネ。ヨク君の学校の話ハ出ルヨ。両君ノ話通りに行ケバ、結構。己レナンカ名ヲ出ス、出サヌ、何の關係モナイ。名ハ出シテイが、ツマラスヨ。僕もナカナカ多忙デ、広島ノ文士問題デー昨日帰ツテ来タ次第。半分ハ在京だ。

早速整爾(はやみ・せうじ)(1868.11.15～1926.9.13) 広島市出身。東京専門学校(現早稲田大学)卒業後、芸備日日新聞社主となる。1902年に衆議院議員となり、花井卓三らと政界革新運動に参加。大蔵政務次官、農林大臣、大蔵大臣を歴任。